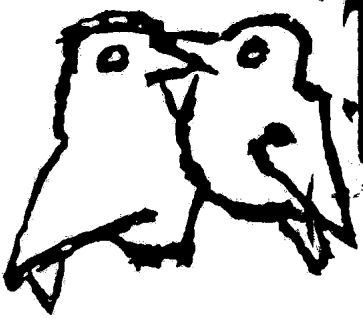
武者小路實篤全集

武者小路实笃全集



苏州工业学院图书馆
藏书章

第十卷

武者小路實篤全集　第十巻

一九八九年六月二〇日　初版第一刷発行

著者――武者小路實篤

発行者――相賀徹夫

発行所――小学館

〒一〇一-〇一　東京都千代田区一ッ橋二丁目三番一号

振替　東京八―二〇〇番

電話　編集・〇三―三二三〇―五一二四

業務・〇三―三二三〇―五三二三

販売・〇三―三二三〇―五七二九

印刷・製本――大日本印刷株式会社

用紙――三菱製紙株式会社

＊著者検印は省略いたしました。　＊造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。　＊本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製（コピー）することは、法律で認められた場合を除き、著作者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

Printed in Japan　ISBN4-09-656010-3

© Mushakōji Saneatsukai 1989

目

次

井原西鶴……一
序……三
井原西鶴……四
伝記小説に就て……四〇
西鶴のことを一寸……四四

愛と死……四七

幸福な家族……九七
幸福な家族……九九
齢……二〇六
暁……二一二

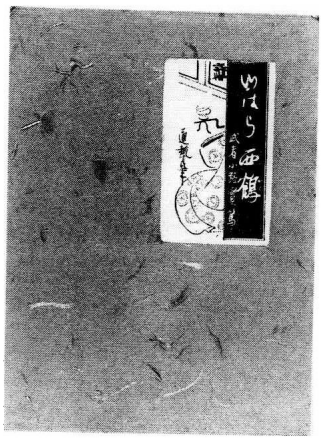
人生論……二六五
序……二六七
人生論……二六七

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

論語私感……三四一
序……三四三
論語私感……三四三
学而第一より一　為政第二より一　八佾第三より一　里仁第四より一　公冶長第五より一　雍也第六より一　述而第七より一　泰伯第八より一　子罕第九より一　郷党第十より一　先進第十一より一　顔淵第十二より一　子路第十三より一　憲問第十四より一　衛霊公第十五より一　季子第十六より一　陽貨第十七より一　微子第十八より一　子張第十九より一　堯曰第二十より一　政治に就て一　孔子に就て
徒然草私感……四六三
序……四六五
徒然草私感……四六五
人類の意志に就て……五一七
自序……五一九
前篇……五二〇
後篇……五六三

人生問答……五九一
序・自序……五九三
人生問答……五九四
第一話　死其他に就て　一　第二話　感情と理性に就て　一　第三話　美に就て　一　第四話　道徳に就て　一　第五話　奉仕に就て、其他　一　第六話　賢者に就て　一　第七話　結婚に就て　一　第八話　不思議に就て　一　第九話　青年に就て
解説・解題……紅野敏郎……六七五

井原西鶴



〔『井原西鶴』（甲鳥書林版）函。〕

序

八九年前自分の「井原西鶴」がある本屋からたのまれて小ぽけな本になつて出ることになつた時、自分はその本屋から同時に贅沢本をつくり友人河野通勢の挿画をつけて出すことを約束した。処がその本屋はその後そのことに就て知らん顔して、小ぽけな本だけ出した。僕はだまされたやうな気がしたが、面倒なのでそのまゝにしておいた。その本は七八年版も重ねず、僕にとつては絶版のやうになつてゐる。まだ本屋の店頭にその本が出てゐると聞くと本の幽霊の話を聞くやうな気がする。今度、甲鳥書林の主人によつて僕が兼々出したいと思つてゐた形でこの本が出ることになつたことを喜ぶ。

僕の「井原西鶴」はさう言ふわけで今度始めて僕の望んでゐる形をとつて出版されるわけで、僕としては気持がいい。

僕は「井原西鶴」をかく時、二人の故人に教を受けた、その二人とも既にこの世にゐない。

一人の人は松村亥太郎君と言つて僕に始めて西鶴の概念を与へてくれた人だ。この人は文学士で中々西鶴のことに委しかつた。いゝ人だつたが若くつて自殺してしまつた。惜しいことをしたものと思ふ。

もう一人の方は、世間からも西鶴研究家として知られてゐる山口剛氏である。この方からもいろ〳〵のことを教へて戴いたので書く自信をなほ得たわけだ。今迄にも御礼をいゝたかつたのだが、贅沢本が出来た時御礼を言ひたいと思つてつい今日までその機会を得なかつた。

それからこの作は八九年前の時事新報にたのまれて書いたのだが、たのみに来たのは笹本寅君だつた。その時分一番仕事のない時だつたから、西鶴のことは何も知らなかつたが、書かうと思へば何かかけると思つて引きうけた。反つて知つてゐたら書く勇気はなかつたかも知れない。松村君をつれて来てくれたのも笹本君で、松村君は僕が西鶴のことを知らないと言つても、もう少しは知つてゐるのだと思つてゐたさうだが、あまり知らないのでおどろいたさうだ。いろ〳〵本も借してもらひ親切に知つてゐることを話してくれた。山口剛氏の処に連れてつてくれたのも笹本君だ。

伝記の参考書は山口剛著「西鶴名作集上下」と、片岡良一著「井原西鶴」だけですませた。それだけでもたのまれた紙数ではかき切れない材料があつた。

西鶴は僕とは随分ちがう性質の人でかけない方面は勿論あるが、それだけ反つて興味をもつて書けた所もあつた。

この作は賞めてくれた人もあるし、僕も嫌ひではない。

小ぽけな拾銭本（あとで無断で拾五銭にしたが）だけで葬るにはあまりにこの作品を愛してゐるのだ。

それで今度は甲鳥書林の同意を得て少し贅沢な本にしてこの作品、及び出てくる西鶴、近松、芭蕉等に敬意を示すことにしたのだ。

挿画は河野君が新聞の為にかいたのを撰び、装幀は甲鳥書林の矢倉年君のすゝめで自分でかいた。

昭和十四年九月二十日

井原西鶴

一

大阪の鎗屋町の小ざつぱりした家に、一人の男が机に向つて何かかいてゐた。彼は夢中になつてかいてゐるやうであつた。つぎからつぎと彼の頭の内には文章が出来上つてゆくらしく、彼はそれを紙にかくのが、もどかしいやうに見えた。何か会心のものをかいてゐるらしく、時々微笑さへもらしてゐた。

「夕陽端山の影くらく、むかひの人来りて里に帰れば、秋の初風はげしくしめ木にあらそひ、衣うつ槌の音物かしましう。はしたの女まじりに絹はりしいしを放して恋の染衣、「これは御寮人さまの不断着、此のなでしこの腰形、くちなし色のぬしや誰。」と尋ねけるに、『これは世之介のお寝巻』と答ふ……」

などとかきつゞられていつた。

この時、誰か尋ねて来たらしく女中にしては少しなまめかしい女がとりつぐと、彼はあわてゝ原稿をかくした。

通つて来たのは彼の弟子らしく、彼の元気な有様を見ると、安心したやうに云つた。

「先生のお身体を皆心配してゐました。」

「この通り、元気にしてゐるから安心するがいゝ。」

「一時は随分力をおとされたときゝましたが。」

「それは宗因先生がなくなられた時は、我ながら不思議に思ふ程かなしくて、一人になるとつい涙がでて、生きてゐるのがいやになつたやうな気もしたが、四五日前から又不意に元気をとりもどして、この頃は自分でも不思議な位ゐ、元気にしてゐる。」

「近作でも御ざいましたら、拝見いたしたいもので。」

「そんなものはない。」

「今、お女中衆におきゝしましたら、この頃は御熱心に仕事してゐらつしやると伺ひましたが。」

「そんなことを云つたか、女と云ふものは口の早いものだな。いや一寸かきものがあるのでかきかけてはゐるが、俳諧ではないのだ。」

「それでは何をかいてゐらつしやるのですか。」

「秘密だよ。見せると目の毒になるからね。」

「何か又世間をおどろかさうと思つてゐらつしやるのでせう。」

「家に許り引こもつてゐたので、つれ〴〵にかき出したもので、世間に発表するかどうか、そんなことはまだ考へてゐないのだ。」

「何か面白いものをおかきになつてゐらつしやるやうですね。」

「お前達に見せたら、よろこんでをどり上がるやうなものさ、だがそれだけに見せてはやらない。」

「見ないと云つても先生のことですから、きつとお出来になつたら、自慢してお見せになるでせう。西吟こんなものが出来たよ。なぞつて。」

「それはさうかも知れないね。そしてお前の喜ぶ馬鹿面が一寸見たいな。」

「どんなものをおかきになつたのです。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「たのしみにして待つてゐろよ。」
「先生のことですから、私達をおどろかして下さることはわかつてゐますが、なんだか早く拝見したいものですね。」
「中々、見せてはやれん。若いものに見せると毒だからな。」
主人はさう云つて、会心の微笑をもらした。
この主人の名は平山藤五と云つたが、本名を知つてゐる人は殆どゐなかつた。だが井原西鶴と云へば俳諧を好む人で知らない人はないであらう。

二

西鶴は何んでもやり出すと徹底しないではやまなかつた。彼は矢数俳諧と云ふものを始めた。それは三十六の時だつた。その時彼は独吟千六百句をつくつた。その後二千三千とつくる人が出来たので、彼は四千つくつた。そして四千翁なぞと自分で称してゐた。
その時彼は三十九だつた。
こんなことで彼は評判は高かつた。心ある人は彼のさう云ふ態度に眉をよせたが、彼は大得意であつた。真似が出来るならやつて見ろ。彼は誰にも出来ないことをやらずにはゐられなかつた。
彼の内には火があつた。燃えるものがあれば燃やさないではやまなかつた。今かいてゐる小説も、かき出しにおいて彼はかう宣言してゐる。『五十四歳までたはむれし女三千七百四十二人、小人のもてあそび七百廿五人手日記に知る。』
女を知る矢数で一等をねらつてゐる。彼の性質の内には誰もを征服したい慾望がある。
だが当時、中々彼にまけない人間が居た。近松や、芭蕉がゐた。又鬼貫なぞもゐた。彼はこれ等の人にうちかたなければならなかつた。そして彼は彼の世界に入りこんだ。
彼はそれを自慢しようとも思はなかつた。むしろ彼は内証にしておきたかつた。あまりに今自分のかいてゐるものはへんなものだから、誤解されたり、正解されたりしては名誉にかゝはるやうにも思へるから。だが彼の内の力はどうしても彼にそれをかゝさないわけにはゆかなかつた。
思ひ切つて彼はかき出して見た。発表するしないは考へてゐなかつた。たゞかきさへすればよかつた、しかし、一方自信をもつてゐた。こんなものが誰にかける。
彼は今迄になくのり気に仕事が出来た。
あまり自慢にもならないことにも思つたが、しかし内心得意ではあつた。彼は思ひ切つていろ〳〵のことをかいた。人間の一面、好色の世界。四十を越した彼にはそれだけが真実のやうに思へた。殊に不幸な生々しい淋しさにやつゝけられた彼には現実の苦痛からのがれる唯一の道のやうにさへ思へた。
その道をいゝと許りは思つてゐなかつたが、しかし彼は恐れずにかいた。
彼は人生の無常をいやと云ふ程知らされてゐた。彼の妻は早くなくなつた。又その妻がのこしていつた彼の一人の女の子は盲目だつた。彼はその原因が自分にあるのではないかと秘かに思つた。さうでないことを望みはしたが、どうもさうとしか思へないので、彼はます〳〵その娘を不憫に思つてゐたが、それも若くつて死んでしまつた。
彼は一人おきざりにされたわけだ。それから彼には痛切な淋しさが身についてしまつた。寂しさを愛する芭蕉の態度は、淋しさを怖

れる彼から見ると仕合せのやうにも思へた。呑気だな！　とも思つた。

しかし存外世なれてゐる彼は、芭蕉の悪口は云はなかつた。むしろ彼はほめた。しかし他人がほめると、あまりいゝ気はしなかつた。

そして、芭蕉を内心やつゝけたく思つた。

彼の内心の敵は芭蕉と近松だつた。

彼はこれ等の人の作品では食ひ足りなく思つた。彼はもつと現実な痛切な刺戟を求めてゐた。それに酔ひたかつた。酒があまり好きでなかつたし宗教心もあまりない方だつたから、彼が酔へるのはたゞ一つのことしかなかつた。

三

彼はある朝、女におくられてあやしい家から出て来た。

彼は昨日からのことを考へた。彼はその女からいろ〳〵の話をきいた。

彼はつかれてはゐたが、元気だつた。朝のつめたい空気は彼の気持をさわやかにした。彼は人生はこのよろこびの他には何にもないのではないかなぞと思つた。

なぜあんな馬鹿なことがたのしいのだ。さうは思つて見ても、それが事実だから仕方がない。彼はさう思つた。彼にとつてはその他の喜びは空のものゝやうにさへ思へた。彼はあまり美しくもない、ありふれた女に今迄味はゝなかつた楽しみがあることを知つた。彼はその秘密を知らうとした。

だが彼は往来を歩いてゐる時、ふと一人の女に出逢つた。それは疲れてゐる寝不足の彼の目にも美しく見えた。殊にその着物の柄や髪のゆひ方が美しく思へた。彼はふと行きすぎて、又あともどりした。彼は自分の本の挿画にその女の姿をかきたく思つた。彼は画も中々うまかつた。今度小説を出版する時があつたら、挿画も自分でかいて、世間をおどろかしたく思つた。

彼の内心には女のこと以外に、仕事のことゝ、征服慾が根強く巣喰つてゐた。又それ以上に芸術家でもあつた。

彼はぴたりとした表現が出来る時が一番心のおちつく時でもあつた。下手な文章をかくことは死ぬより彼には恥かしいことに思へた。それだけに、うまい文章がかけた時は彼は子供のやうにうれしくなり秘密にしておくことを忘れて来る人をつかまへてはよんできかせたくなつた。

彼は家に帰ると、すぐ床に入つてぐつすりねた。そして目がさめると顔をあらひ、飯を食つて、又机に向つた。

彼は酒はのまなかつたが、食ひ道楽ではあつた。料理屋の仲居か何かしてゐた彼の女中は彼の性質をよくのみこみ彼の食ひ物の好みも知つてゐた。

それで彼は家に居ればおちついて仕事が出来た。彼は一面きちんとした男で、又厳格な男でもあつた。女は彼を恐れてゐるらしく、彼の云ふ通りに万事をやつてゐる。彼の神経にさはらないやうにしてゐた。

彼は家のなかに、他の人が居ることを忘れて仕事をすることが好きだつた。彼は家に居ると勝手をふるまつた。

しかも客、それもいくらか目上の客がくると彼は謹みを忘れなかつた。おべんちやらは、云はなかつたが、如才ない一面もあつた。そして礼儀を失なはなかつた。一家の見識はもつてゐたが、それで他人の神経を害しはしなかつた。だから人づきあひはいゝとも云へ

なかつたが、少数の人にはすかれた。殊に彼は座談が巧だつた。殊にワイ談は天下一品だが、しかし彼はそれを少しもいやしくは話さなかつた。笑ひもせず、下卑た顔もせず、すまして話をした。聞くものが笑ふのを彼は反つて不思議さうな顔をしたが、しかし時々は彼も哄笑をした。

彼は人にほめられるのが好きだつた。会心なことがあると、彼は途方もなく馬鹿笑ひをすることがあつたが、すぐ又けろりとして、冷静な顔をして、他の人には云へないやうなことをすまして云つた。

だが趣味の高い、神経質な男も彼の話を顔を赤らめずに聞くことが出来た。彼は冷静に客観的に、自分のことか、他人のことかわからないやうに話すことが好きだつた。

四

或日彼の弟子の団水が京都からたづねて来た。団水は京都名産の八ツ橋や、漬物をもつて来た。彼は西鶴の好きなものを知つてゐた。西鶴は喜んで団水を自分の書斎に通した。西鶴は一体に綺麗ずきで、仕事の間は香をたいて、きちんと仕事をするたちであつた。

団水は相変らず西鶴が自分の師の宗因の句を床の間にかけ、その前に花が風流にいけてあるのを見た。彼は室に入ると、先生が仕事をしてゐることを知つた。机の上には原稿は何にもおいてなかつたが、先生の秘蔵の硯箱には香りのいゝ墨がすつてあり、筆には墨がついてゐた。

「御仕事最中で御邪魔ではありませんか。」

「邪魔なものか、誰か来てくれゝばいゝと思つてゐた。京都はどうだ、何か面白いことがあるか。私もその内あそびにゆきたいと思つてゐた。」

「どうぞおいで下さい。私も毎日先生がいらつしやりはしないかと心待ちにしてをりました。」

「相変らず嶋原に出かけるか。」

「中々どういたしまして。」

「何か面白い話はないか。大尽遊びの話でもきかないか。」

「別に新しいことはきゝませぬ。」

「太夫は元気にしてゐるか。」

「先生が暫くお見えにならないとさう申してゐました。」

「ゆきたいとは思つてゐるが、何かと用が多いのでね。この頃何かつくるか。」

「時々はつくりますが、面白いものは出来ません。」

「さういゝものは出来るものぢやない。千つくつて一つでもいゝものがあればそれでいゝとしなければならない。この頃バテレンに逢ふか。」

「いゝえ、高政先生には少しもお逢ひしません。先生と喧嘩なさつてから。」

「喧嘩なんかしたことはないよ。私はあんな男は眼中においてはゐない。だが古い友達だから時には思ひ出す。こつちではもう腹なんかたてゝはゐない。だがあつちでは今でもまだ怒つてゐるだらう。随分ひどく悪口を云つてやつたからね。」

「高政先生は、先生のことを今でも怒つてゐるさうで御ざいます。」

「さうだらう、あいつは気が小さい男だからいつまでもぐづ〳〵云つてゐるだらう。だが私の方ではもう何とも思つてはゐない。」

「先生は今、面白いものをかいてゐらつしやるときゝましたが。」

「誰にきいた。」

「皆がさう云つてゐます。」
「さうかな。もう評判になつてゐるか。」
「よるとさはると、その話をしてゐます。私にも是非拝見さして戴きたいもので。」
「誰も全部見たものはないのだ。だがともかく風がはりのものをかいてゐる。出来たら見せてやる。」
「いつ頃お出来になるのです。」
「まあ、あと三月や四月はかゝるだらう。」
「そんなに長いものをかいてゐらつしやるのですか。」
「なんでもかいてやらうと思ふのだ。」
「源氏の向うをはらうとお考へださうですね。」
「誰がさう云つた。さう云ふわけでもないが、しかしまあ、そんな所かも知れない。」
「西吟からの手紙では、すばらしい文章で、すばらしいことがかいてある。片鱗を見ただけだが、おどろいたとかいてありました。」
「大げさな奴だな。だがまあ、そんな所かも知れない。」
西鶴はうれしさうに笑つた。
「私にも一寸でよろしいから見せていたゞきたいもので。」
「中々さうやすつぽくは見せられない。」
「そんなことを仰有らずに。」
「誰にも云はないと云ふなら、少しは見せてやつてもいゝ。」
「決して云ひません。」
「それがあてにならないからな。」
「そんなことをおつしやらずに。」
「それならちよぴつと見せてやるかな。勿体ないな。」
西鶴はさう云つて、かきかけの原稿を出して見せた。

美しいこつた字でしかしくづしてかいてあつたが、師の字を見なれてゐる団水には楽によみつゞけられた。団水はよみながら感嘆の声をだした。西鶴はそれをわざとらしくも思つたが、しかしいやな気はしなかつた。
「どうだ。」
「本当に聞きしにまさる立派なものでございますね。」
「之からが面白いのだ。何しろ思ひ切つていろ〳〵のことをかいて見る。女のきらひな男は知らず、女のすきな男だつたら、誰でもよみたがるものをかいてやるのだ。」
「かいてあることも面白うございますが、文章の調子の高さに感心いたしました。」
「それがわかるか。」
「わかるかは情けなうございます。」
「それがわかつてくれゝば私も本望なのだ。ひゞきのある、煮つまつた文章もかきたいと思つてゐる。張り切つた鉄線のやうな文章をね、だがむづかしい。」
「こんなひゞきの強い文章が今の言葉でかけるとは思ひませんでした。」
「お世辞がうまくなつたな。」
「お世辞なんか申しません。」
「怒るな、私だつてそのくらゐの自信はある。世間の馬鹿は源氏をこんな風にしたと云つて、神聖なものをけがしたやうに怒る奴もあるだらう。だがわかる奴にはわかるだらう。」
「それはわかりますとも。」
「わからんでも一向かまはないが。」
西鶴はさう云つた。

「好きでかくのだから、そして自分で気に入るまでかき通すのだから、他の人に何と思はれても、それは仕方がない。だが私には自信はあるのだ。西鶴は段々西の鶴ではなくなつて来た。私は自分が天下の鶴、大鵬になつて来てゐることを自分では感じてゐるのだが、世間の奴は、そんなことを云つたら、目をまるくして気ちがひだと思ふだらう。尻の穴の小さい連中にあつてはかなはない。」

西鶴はさう云つてうれしさうに笑つた。

「かう云ふものをかいた、見せてやらう。」

彼はさう云つて、何枚かの紙が丁寧に重ねてあるのをとり出して見せた。

団水は畏まつてそれを受けとつてあけて見ておどろいた。

「今度かいてゐるものゝ挿画さ。その内のひどいのは本にはのせられないが。」

団水は師の多才におどろき、そしてその画のつやつぽさにおどろいて黙つて見た。ほめる言葉も容易には出なかつた。

五

驚くやうな立派な本をつくつてやる。

西鶴はさう云つた。

団水もそれの本当のことを信じた。がしかし世間は何と云ふであらう。とかく師の素行をほめたがらない俳諧の方の敵はいゝ材料を得たと思つてつけ上るであらう。

だがそのことは云へなかつた。そして師にたいする尊敬の念は増すのであつた。

「臆病はいけない、何んでも思ふ存分のことをやつてやる。私は人生が無情なのを知つてゐるだけ生きてゐる間は思ふ存分のことをやつて見るつもりだ。この私の気持が、師にも、殊に高政のバテレンにはわからない。大きな力強い羽をもつものが、いぢけてはゐられない。あばれるだけあばれてやる。芭蕉にもこの気持はわかるまい。」

「それはわかりますまい。」

「だが芭蕉と云ふ奴はあれで中々のくせものだ。へんに大きな処がある。あいつに私の大きさはわかるまいが、私にはあいつのよさはわかるのだ。」

西鶴はさう云つた。

「団水、久しぶりだ、何処かへ食べにゆかう。」

団水は元よりよろこんで承知した。二人は難波の町を歩いてゐた。

「泰平の御世と云ふものはありがたいものだとは思はないか。かうやつて町を歩いて道ゆく人を見るのは実に面白いものだ。碌な顔した奴には逢はないが。時々珍しい掘り出しものがある。難のない人間は少ないが、難許りの人間も少ない。私は山野を歩くよりは町のなかを歩いて、男や女の顔や姿を見る方が面白い。昨日はへんな爺の顔を見た。歯ぐきがないのか口をもが〳〵やつては時々両方の口唇を鼻の頭にのせて休ませる。その珍妙な顔にはおどろいた。時々は面白いものに出くわすものだ。」

「本当で御ざいますね、乗合船もいろ〳〵の人とのりあつて、その人達を見たり、その人達の話をきいたりするのはたのしみなものですね。」

「さうだ私達が旅を面白がるのも、いろ〳〵の人に逢へたりいろ〳〵の風俗を知ることが出来るからだ。私はどうも山や水を見てゐると、たよりない気がする。何んだかものたりない。」

「先生のおたのしみは、一つのことだけですものね。」
「さう許りでもないが、だが私は俗に出来てゐるか、食ひ物と、人間に興味がありすぎる。」
「人間にもよるでせう。」
「食べものだつて腹がはるだけでは仕方がないからね。」
「先生は随分方々へ、御旅行なさつたのですね。」
「さうさ、日本全国歩かない処はない。」
「本当ですか。」
「耳だけで歩いた処もあるがね。」
「何処が一番お気に入りました。」
「何処もいゝな、だが矢張り都がいゝな。」
「女のいゝ処がいゝのではないのですか。」
「女の賢い処がいゝな。美しい女は何処にもゐるが、神経がこまかい者でないと面白くない。田舎料理がまづいやうなものだ。」
「先生が感心し切つた女がございますか。」
「それはあるね。」

六

翌日西鶴は自分のかいてゐる小説にかうかきつゞけた。
「都をば、花なき里になしにけり、吉野は死手の山にうつしてと、或人の読り、なき跡まで名を残せし太夫、前代未聞の遊女也、いづれをひとつあしきと申べき所なし、情第一深し……」
西鶴は大がいの場合欠点を見のがさない男だが、広い世界には、西鶴を感心させる女もあつた。
それからいく日か後に彼は又こんなことをかいてゐる。
「大橋は、せい高く、目つきすゞやかに、口つき賤しく、道中思はしからず。……」
「お琴はふつゝかなる貌、いやらしき所、それをすく人も有、万かしこ過て…、慾ふかく、首すぢの出来物、ひとつの歎也。」
「朝妻は、立のびて、腰つきに、人のおもひつく所も有、脇顔うつくしく、鼻すぢも指通つて、気の毒は其穴、くろき事煤はきの手伝ひかと思はる……」
だが彼はかうかいて来たのは、一人の太夫夕霧をほめるためでもあつた。
「神代このかた、又類なき御傾城の鏡、姿を見るまでもなし、髪を結ぶまでもなし、地顔素足の尋常、はづれゆたかに、ほそくなり、恰合、しとやかに、しゝのつて、眼ざしぬからず、物ごしよく、はだへ雪をあらそい……名誉の、好にて、命をとる所あつて、あかず酒飲で、歌に声よく、琴の弾手、三味線は得もの、一座のこなし、文づらは高く、長ぶんの書で、物をもらはず、物を惜まず、情ふかくて、手くだの名人、是は誰が事と申せば、五人一度に、夕霧より外に、日本広しと申せ共、此君〳〵と、口を揃えて誉めける。」
西鶴はすべての優れた作家のやうに、この一つの本の内に女のことならなんでもかいてやらうと思つてゐたらしく、乗気になつてかいてゆく。
その時彼は読者のことも、世間のことも忘れてゐたにちがひない。彼は自分がかきたいだけかきまくるつもりでゐるやうだつた。悪魔につかれた人のやうに彼はかいてゆく。
仕事は面白いやうに運んでいつた。現実と空想の境がわからなくなり、彼は頭に浮ぶことをつぎ〳〵にかいてゆけばよかつた。彼は始めて自由な天地に入つた。時のたつのを忘れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com